

瓦谷山



瓦谷山だより



vol.21

発行日 2012年12月吉日

発行人 (宗) 真光寺
岡本和幸

印刷 現代社
編集 (宗) 真光寺

問い合わせ先
(宗) 真光寺
TEL 0438-75-7414

○お寺HP
<http://www.shinko-ji.jp/>
○上総自然学校HP
<http://www.shinko-ji.jp/satoyama/>
○お寺ブログ【瓦谷山だより】
<http://sinkoji.cocolog-nifty.com/news/>

ごあいさつ

憎しみの心を捨てよう

平成二十四年は領土問題に揺れた一年でした。そんな中、不思議な光景を見ました。

真光寺は、野鳥天国です。樹木葬墓地には多くの実のなる木が植えてあり、境内の池は絶好の水のみ場となります。特にスズメが爆発的に繁殖しています。お寺の建物は軒が深く、複雑な木組みが施されているので、巢をかけるスペースがたくさんあります。特に仏殿がお気に入りの方で、鬼瓦の口の中に営巣しています。糞公害、騒音公害に悩まされる半面、樹木葬墓地の毛虫を食べてくれるので、貴重なパートナーという側面もあります。樹木葬墓地には桜の木がたくさん植えてあります。桜の木は毛虫がつくことでも有名です。今年も桜の木が毛虫に葉を食われて丸裸にならなかったのは、仏殿のスズメのお陰かもしれません。そういう意味でも、とても大切に思っていました。

さらに今年は初めてツバメが営巣しました。こちらは蚊やハエなどを食べてくれます。昔はツバメが巢を作ると家が繁栄するといわれていましたので、大いに期待していました。

風薫る五月のある日、ツバメの巢から小さな鳴き声がしています。巢作りから抱卵と続き、ついにヒナが生まれたのです。私を始め職員一同、驚かさないうちに気を使いながら、時々観察していました。数日後、ツバメの子供が四匹すべて巢の下に落ちて、すでに虫の息です。私はあわてて脚立を出し、巢に戻してやりました。よく見てみると、樹木葬墓地の毛虫をたらふく食べて丸々と太ったスズメが、集団でツバメの巢を襲い、中の子供を摘み出していたのです。見上げればツバメとスズメは激しい空中戦を行っています。傍らには攻め手のスズメが一匹、壁に激突して死んでいました。私が戻したツバメのヒナはすぐに巢の外に放り出され、死んでしまいました。さらにスズメの襲撃は続き、ツバメの巢は跡形もなく破壊されてしまったのです。きっと福をもたらしてくれるだろうと期待していた

のですが、残念な結果となってしまいました。

それから半月後のある日、お寺の上空を二十匹ほどのツバメが旋回していました。観察していると、仏殿の鬼瓦の口の中にあるスズメの巢のところに飛んで行つては、鬼瓦の中から巢の材料の藁を引っ張り出しているのです。ツバメはなんと二回も集団で仕返しにきました。食べ物も違いますし、仲が悪いという話も聞いたことがないスズメとツバメが命がけで戦う理由は果たして何なのか、両者の間に何があったのか。そんな不思議な出来事でした。

「これがもしも人間であれば、話し合いで解決する方法もあるし、住み分けも可能なのに」と思いましたが、現実的にはどうかといえば、人間もまた領土をめぐる争いに劣る戦争を繰り返しています。過去の過ちを二度と繰り返さぬよう、攻撃的な言葉に惑わされない強い決意が必要だと考えます。

平成二十四年のトピックスとしては、真光寺の境内に「曹洞宗千葉県事務所」が仮事務所を置いたことが挙げられます。現在、私は千葉県宗務所所長を務めております。曹洞宗の千葉県寺院の代表といった役職です。宗務所事業として、県内寺院からの募金をお預かりし、市原市内に新しい事務所を建設するプロジェクトを指揮しています。順調に進めば、平成二十六年暮れには仮事務所を撤去し、新しい事務所への移転が完了します。ご迷惑をおかけしますが、ご理解ご協力のほどお願い致します。

真光寺では檀信徒の皆様が気持ちよく安全にお参りいただくとともに、諸行事に、より大勢の方々がご参加いただけるよう、山内の整備と、行事の拡充をはかっています。年始には新しい一年の御多幸を祈る祈禱の行事を行います。また春には日帰りの団体参拝も企画していますので、ふるってご参加下さい。明年もよろしくお願い致します。

合掌

住職 岡本和幸

行事報告

◇七日法要〔六月〕

午前は授戒式、午後は坐禅・写経をしました。



授戒式 血脈授与



午後 坐禅会

◇縁の会施食会〔七月・八月〕

七月・八月の施食会には延べ一二五名のご参加者を得て縁の会会員物故者、先祖代々の供養を行いました。



7月 施食会 食堂にて



8月 施食会 書院にて

◇山門大施食会

八月九日、近隣の諸老師を招き恒例の山門大施食会が行われました。毎年行われるこの行事に夏を感じます。



施食法要に先立ち住職によるお盆の法話



婦人会の方々による御詠歌の奉詠

◇七日法要〔九月〕 授戒式、坐禅・写経

午前は授戒式、月例供養を行い午後は坐禅、写経、写佛をしました。

◇秋季彼岸法会

彼岸は昼夜の時間がほぼ同じになる時期です。ご先祖さまに感謝すると共に、自分自身の仏心を見つめ直す修行期間です。



古今亭よりんさん

法要後の落語会は、
【檀信徒】
古今亭志ん吉さん
【縁の会】
古今亭よりんさんを
招き会場は笑いに
包まれました。



古今亭志ん吉さん

◇七日法要〔十月〕 授戒式、坐禅・写経

午前には授戒式、月例供養を行い午後は坐禅、写経、写佛をしました。季節も良く日曜日ということもあり参加者は六十五名でした。



10月は34名の方が授戒されました



写経のようす

◇梅花流千葉県奉詠大会

住職が所長を拝命されている千葉県宗務所主催の梅花流千葉県奉詠大会が十一月十五日に開催されました。住職率いる真光寺梅花講(婦人会)七名が登壇し、日頃の練習の成果を発表しました。



縁の会総会報告

十一月三日（土）、第二回真光寺縁の会総会を開催いたしました。

■法要

午前十一時より書院にて本尊上供と月例供養を行いました。本山での修行からもどられた手島涼仁師と瀧澤遥風師も随喜しました。

■総会

・平成二十三年度会計報告をいたしました。

・樹木葬墓地の管理について次のようなお知らせとお願いを致しました。



総会には104名がご参加されました

①猪の侵入と碑のずれについて

周辺の山から樹木葬墓地に猪が侵入する場合があります。猪は墓碑の周囲に植えられた草の根と碑の裏に住む虫などを好む性質があり、碑をどかそうと移動させることがあります。

対策として、墓苑の外周に電気柵を設けてあります。夕方、職員が電気を流しますので昼間は安全ですが、念のため近づくことは避けてください。猪がお墓を荒らすことは頻繁に起こることではありませんが、墓参の際に不自然に碑がある状態を発見されましたら、寺務所までご連絡をお願い致します。また、霜のシーズンには霜柱が碑を動かすこともあります。

②お供え花の繁茂

お供え花の中には、お隣の区画にはみ出ているものが見受けられます。

対策として、著しく繁茂しているものについては、これまでどおり撤去を行っていきます。植え付けの目安としては碑の周囲に1〜2重が限度です。（一重は十ポット程度。）また、多年草を植えていつていらつしやる場合にも、繁茂を防ぐために一定期間ののち処分いたします。

③人工物の撤去について

お供え花の中には、人工物（プラスチック製品）を添えていらつしやる場合があります。一定期間ののち、処分いたします。

④下草の管理について

真光寺では現在、下草を刈り取ることで管理をしています。雨の後など管理工程以上に繁茂することもあります。樹木葬墓地とはそうしたことが起こる前提の場所であることをご理解のほどお願いいたします。

また、上記のような理由で雑草を抜いて清掃される場合があるかと思いますが、土の流出につながるため、刈り取りにて清掃をしてください。刈り取り用のはさみは寺務所で貸し出しています。

⑤ゴミについて

お花のポットなどのゴミは持ち帰りをお願いします。刈り取った草については、寺務所にお申し出ください。（以上 質疑なし）

■法座

午後より会員相互の親睦会にあたる法座を行いました。自己紹介に加えて今回はお寺へのご要望をお伺いいたしました。特にわかりやすく安心できる葬儀へのご関心が高く、ご要望にお答えできるように準備してまいります。



昼食は真光寺新米の炊き出し付き

■ジャグリング・落語会・抽選会

十四時からは芸人さんをお招きして、演芸会を催しました。ジャグリングでは外の空間を生かしたダイナミックな技が決まると、ひととき大きな拍手と歓声があがりました。

お客さんと息がぴったり？
こ〜すけさん



当選確率1/3!!
大抽選会

真光寺ではおなじみ
古今亭志ん吉さん



来年も皆様のご参加をお待ちしております。

真光寺日記

三月十一日、永平寺に上山した手島涼仁師が半年間に渡る修行を終え、帰山しました。一般社会と隔絶された修行道場の様子は果たしてどうだったのでしょうか。手島師の体験を通じて、お伝えしてみたいと思います。

■永平寺日記【一】 上山と旦過寮

今何時なのか、今どこを歩いているのかも分からない、しかし極端に狭い視界からは、まだまだ多くの雪が降り積もっていることは確認できた。今日は東日本大震災から一年経った三月十一日。永平寺門前にある地藏院から山門までに考えたのは、これから耐えなければならぬ修行のあれこれではなく、ただ足下を見つめ転ばないようにすることだけだった。私は八番上山の一番目だったので、前を歩く古参和尚さんに遅れまいと必死に歩き、止まれと言われれば止まり、歩けと言われれば歩き、そこに立てと言われれば立ちという単純極まりない動作を黙々と続けていた。今考えると地藏院から山門までの到達時間は、大した時間ではなかったと思われるが、その時はこれから何が待ち受けているのかも想像できずとてつもなく長い時間を感じられた。

山門に着くと引率の古参和尚さんは立ち去り、八番上山の八人だけが残された。永平寺の三月はまだまだ寒く、異常な精神状態も相まって震えが止まらなかった。私の右隣には昨日より一緒だっ

た同日上山の仲間が立っていたが、まだ顔は見えていなかった。地藏院に到着する前に古参和尚さんの指導で絶対に視線を上げてはいけないことを言い伝えられていたためだったが、それ以上に自分のことだけで精一杯で、他の七人がどんな人なのか考える余裕がなかったことが大きい理由だった。どのくらいの時間が経ったのだろう、いきなり目の前で人の声がした。何と言われたのか、正直今となつては思い出せないが、多分「お前はだれだ」とかいうものだったような気がする。「はい、失礼致します。千葉県二二番 真光寺徒弟 手島涼仁です。失礼しました」。次に隣の八番の二の者が同じように答え、三、四、と続き、最後に八の者が答え終わってからふたたび静寂が辺りを包んだ。そして静寂を破るように突然私の前で、「お前は何しに来た」と質問された。「はい失礼致します。東日本大震災の被災者の供養をするともに、道元禅師のお膝元で自らの修行を行うために参りました。失礼いたしました」と答えた。記憶している。これまた順番に同じことの繰り返し、最後に「このまま立ってろ」と言われ、また静寂が訪れた。今度の静寂は非常に長かった。身体はさらに震えにふるえ、緊張はさらに深まりふかまった。

私たち八人が草鞋を脱ぐことを許されたのは、先ほどの静寂から何回かの問答が繰り返された後だった。後から聞いた話では山門に立った時点から二時間ほどしか経っていなかったようである。その後足を温める桶が用意されている部屋に通され、寒さで固まっている足をお湯につけ、別室で素性を記帳し、八人全員が終わった時点でその部

屋で面壁して坐禅をして待たされた。これから一週間、旦過寮（たんがりよう）と呼ばれる長く厳しい生活の始まりである。この旦過寮を経て初めて入堂（僧堂に入ること）が許され、正式な雲水になる手前の「暫到（ざんとう）」という資格が与えられる。何にせよ、この旦過寮を経ないと始まらない。

旦過寮の一日は、恐ろしく規則正しい。時間、行動全てが個人の自由は全くない。起床、就寝、洗面、東司（とうす、トイレのこと）、飯台（はんだい、食事のこと）、坐禅、朝課、全て八人一緒に並ぶ。移動する時は一列に並び、洗面する時も一列に並び、一切の私語は許されず、古参和尚さんに聞かれたら、基本、はい、いいえ、しか答えられない。視線を上げるとは相変わらず許されず、指導頂いている古参和尚さんの顔はもちろん、同日夜居の七人の顔もまだ見ていない。六日目までは浴司（よくす、お風呂のこと）に入ることは許されず、髪、髭は伸び放題、そして体臭も強烈だったらしい（自分たちは全く臭いという感覚がなかった）。



真光寺山門から出発。まだ笑顔。

一日はこのように規則正しく流れていくが、その合間にこれからの修行生活に必要な進退（しんたい、合掌や低頭、歩き方など、修行生活に必要な基本的所作のこと）の指導、応量器（食事の時に用いる食器）の使い方、経本の持ち方、坐禅の組み方などの指導が入ってくる。ただ優しく指導されることはほとんどない。基本、教えてもらえぬ機会是一回。その後はそれができて当たり前、できなかった場合は厳しい指導が待ち受けている。四十三歳の我が身としては、これまでの人生の中でここまで怒られたこともないし、多分これからはないと思われる。それぐらいのご指導を頂いた。

四日目からは九番上山が入ってくるので、且過寮での生活が徐々に変わってきた。指導中心から坐禅と偈文（げもん、飯台をとるときや洗面、東司をする時の唱えごと）の点検の時間に費やされる。この頃、一日がとてつもなく長く感じられ、足は痺れ、肩は疲れ、頭も疲れ、眠く、腹を空かせと体力的にピークにくる時期がこの時期。そして私は何の為にここにいるのか、これからどうなるのか、修行を続けることができるのかと精神的に追い詰められるのもこの時期。天気も時間も分からず、まさに「自己」との戦いがこの且過寮と言えるかもしれない。

三月十七日（その時は日付の感覚は全くないが）、翌日に入堂を控えて、初めて浴司に入ることを許された。午後二時より約一時間半、八人の仲間と古参和尚さんの九人で湯船に浸かり、この一週間の話で大いに盛り上がった。私はこの時点で初めて一人ひとりの顔を見ることができた。取り敢えずこの一週間を無事に過ごすことができた。

安堵感が漂っている顔には、それ以上に疲れ切った表情が色濃く現れていた。そして私もその一人だったことは間違いない。自由に話せたのは、この浴司の時間だけ。浴司から出るとこれまで通り目線を下げ、私語が一切ない時間が待ち受けていた。翌十八日、入堂の拝を行い、いくつかの書類に必要な事項を記入し、丸々一本の羊羹をあつという間に平らげると、私たち八人は衆寮（しゅりょう）う、鳴らし物や飯台の準備をする修行僧が経験する一番基本的な部署）に配属された。晴れて暫という立場になったことになる。

長く長い且過寮、ここでの経験が私にどんな意味があつたのか。今考えると、多分意味なんかきつとなく、ただそれを受け入れて過ごした時間だけが残つたような気がする。ただ受け入れる、それは道元禅師が繰り返し語っていることに通じることかもしれない。永平寺での安居生活はこうして始まった。

つづく

且過寮の写真資料はほとんどなく、その点だけでも閉鎖された環境であることが伺える。手島師は下の航空写真○印の建物の地下室において且過寮に参加した。



平成二十五年 年回表

一	周忌	平成二十四年
三	回忌	平成二十三年
七	回忌	平成十九年
十三	回忌	平成十三年
十七	回忌	平成九年
二十三	回忌	平成三年
二十七	回忌	昭和六十二年
三十三	回忌	昭和五十六年
三十七	回忌	昭和五十二年
五十	回忌	昭和三十九年

平成二十五年の年忌法要のご案内です。

ご法事の申込みは、事前にお電話等でお申し込みください。ご法事の準備物は下記の通りです。

- お位牌
（自宅用が無い時はお寺で用意します）
- ご遺影
- 生花
（五千元でお寺でご用意できます）
- お供物
（二千元でお寺でご用意できます）
- 卒塔婆・花とうば
（事前にFAX又は電話にてお知らせ下さい）
- お布施
（三万円〜五万円程度 お気持ちで）

団体参拝旅行記

十月二十一日・二十二日の日程で「曹洞宗迦葉山参拝と越後名刹の旅」を催しました。高尾山薬王院、鞍馬寺と共に「日本三大天狗」の一つに数えられる迦葉山弥勒寺（かしようざんみろくじ）から川場酒蔵へ。湯沢に宿をとり、二日目は幕末の名匠石川雲蝶の彫刻、絵画、漆喰細工がある西福寺・開山堂に立ち寄り、「雲洞庵の土踏んだか」の文句と大河ドラマ「天地人」の舞台ともなったことで有名な雲洞庵へ、文字通り越後名刹を堪能できる旅となりました。

今回は二十七人という大勢の参加者を募ることができ、真光寺団参旅行初の大型バスでの移動となりました。今回はお二人から旅行記を寄稿いただいております。真光寺の旅が気兼ねなく、楽しい旅であることをお二人の旅行記から感じ取っていただきまして、次回、より大勢のご参加をお待ち申し上げる次第です。

曹洞宗迦葉山参拝と越後名刹の旅に参加して

熊谷 勝志

十月二十一日（日）、二十二日（月）の両日、私ども夫婦は曹洞宗迦葉山参拝と越後名刹の旅に参加しました。真光寺の団体参拝旅行に初めて参加する私たちは小学生の遠足気分で出発の日を迎

え、期待にたがわずとても楽しい二日間を過ごすことができました。

出発の朝は快晴で、我々二十七人の乗ったガイド付のサロンバスは渋滞にも遭わず、順調に閑越道に入って奥秩父の山々を眺めながら高速をひた走りました。上州に入ると、稜線も鮮やかに右手に赤城、左手に榛名の山々、バスは丁度その間を抜けるように走っていきます。その雄大な山容を望みながら、アナクロ人間の私は、おお帝国海軍の航空母艦と巡洋戦艦の命名山が一望できるわいと思ってしまうしました（笑）。

沼田で昼食をとり、迦葉山龍華院彌勒護国禅寺へ。

天狗のお山として親しまれる迦葉山は平安時代に天台宗のお寺として開基され、室町時代に小田原・大雄山最乗寺の天巽慶順禅師によって曹洞宗に改宗されたとのこと。大雄山は私たちが住んでいる平塚に近く、何回もお参りしている大好きなお寺。同じく天狗のお寺であり、雰囲気も深山幽谷の気配がよく似ています。巨大な天狗のお面をまつてある中峯堂（拝殿）をお参りし、本堂へ。御祈

祷を受けた内陣は山の斜面に建っているようで、急な階段のかなり高い位置にあり、読経と大きく鳴り響く



太鼓が参拝者の頭上から舞い降りて来るという珍しい構造。

御祈祷も有難味が増すというものです。

続いてバスは川場村の土田酒造へ。

小じやれた建物に入って酒蔵の見学と利き酒。土産物コーナーでは、お酒はもとより漬物や日本酒酵母を入れた化粧品も売っており、私は、譽国光というお酒を買いました。また、酒蔵の入り口で売っていた大吟醸ソ

フトクリームなるものを食してみました。名前からして酒の風味がするかと思いきや、なめらかな味の美味しいソフトクリームでした。

バスは高速に戻り、谷川岳の下を貫通する長さ10キロ、日本最長という閑越トンネルを抜けて越後へ。「国境の長いトンネルを越えると雪国だった」というには季節がちよっと早かったわけですが、しかしそこは太平洋側と日本海側を分かつ上越国境、新潟県に入るや天気は一変して雲が低く垂れこめ、明日の天気心配される空模様。泊りは湯沢グランドホテル。

皆さん、それぞれ自分の部屋で寛いだ後、浴衣に着替えて一風呂。

大広間での宴会は、御住職の挨拶に続いて乾杯、そして自己紹介。御飯は座敷にしつらえた釜で炊くという米どころならではの趣向もあり、一同大



いに盛り上がってカラオケという段。皆さんお上手、特に御住職……意外でした（失礼）。一曲勧められた当方、ちよつと喉がおかしくてなどと遠慮の構え。この時点では、うかつに本性を現すわけにもいくまいという理性と見栄がまだ残っていたようです（笑）。で、宴会お開きの後はカラオケルームへ。ここでは勧められるままというより自ら進んで結構歌わせていただきました。たしか御当地への挨拶がわりに三波春夫の「チャンチキおけさ」などもだみ声でうなつたはずですが、翌朝目覚めたときは、例によって昨晚の記憶は霧に閉ざされ忘却の彼方へ。旅の恥はかき捨てということで、どうぞ一笑に付してお許しください。

あくる朝、心配された天気も上々、朝日がまぶしいほど。バイキングでの朝食を終え8時半にホテルを出て曹洞宗赤城山西福寺へ。

このお寺は道元禪師と開山芳室祖春大和尚とをおまつりした開山堂の彫刻で有名であるとのことですが、私は幕末の彫刻家、雲蝶の名前を知りませんでした。しかし、開山堂に入るやその見事に圧倒され、自らの不明を恥じた次第。一見の価値ある見事な彫刻です。越後魚沼に行く機会がありましたら西福寺に立ち寄る事をお勧めします。また、開山堂を建立した大龍和尚はその出費等が原因で寺を追い出されたそうですが、雲蝶とは終生変わらぬ友情で結ばれていたというエピソードを知り、心温まる思いがしました。

そしてバスは、参拝の最後となる曹洞宗雲洞庵へ。当寺は、楠正成の孫、能勝禪師が開基し、直江兼続が上杉景勝の小姓として共に教育を受けたという越後の名刹です。大河ドラマの舞台となった

ため放映中は大変な人出だったそうで、その辺の事も含め、当地の観光ボランティア渡部さんの解説は下手な芸人など裸足で逃げかねないオモロイ解説で、笑いが絶えない参拝となりました。本堂は、出雲崎の船大工によって建てられたという武骨ながら堂々とした建物。一同は御本尊の前に座り、御住職に唱和して般若心経を合唱しました。冷涼な空気の中、真光寺一行の般若心経は本堂に鳴り響き、身も心も洗われる素晴らしい読経が経験できました。

楽しい旅も終わりに近く、石打の食堂で越後名物へぎ蕎麦を昼食とし高速に乗って帰路に着きました。

無事東京駅に着き、この旅行に参加して本当に良かったなと思いました。このような機会があれば、是非また参加したいと思います。

最後に、御住職を初め真光寺スタッフの皆さん、東武トラベルの石川さん、運転手の野口さん、すばらしい話術とサービス精神で我々をもてなしてくれたガイドの小池さん、そして私ども夫婦と親しく接してくださった檀信徒の方々及び縁の会の皆さんに心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

ぜひ、ご一緒しましょう！

古城 武志

何を隠そう。私は、お経を唱えることができないし、正座するのも大の苦手だ。おまけに、堅苦しいことはまっぴらご免である。そんなわけで、

縁の会に入会したものの、お寺の行事には無関心を決め込んでいた。ところが、ある七日法要の食事の席で、隣り合った方からいろんなことを教わり、真光寺主催のバス旅行に誘われた。

その方の風貌や声調などから、てつきりお坊さんだと思っていた私は、せつかくのお誘いを有り難く感じ、おずおずと「それでは よろしくお願いたします。」と、ご返事申し上げた。そして参加したのが、去年の静岡県の可睡斎と愛知県の妙巖寺の旅。その旅程と楽しさは、瓦谷山だより十八号に檀家の小沢さんが名文を寄せておられますが、私はこのバス旅行を体験して、いわば目からうろこがスッパリと落ちた感じで、いそいそと今年も参加させていただいた。

今年は、群馬県の迦葉山と新潟県の開山堂・雲洞庵を訪ねる旅でしたが、感じたことを率直に申し述べることにしたい。なお、二日目の夕方、千葉駅前バスを降りても旅行の興奮冷めやらず、だれしもがお坊さんと思える方と近くの居酒屋で飲み直し、意気投合したことのごく一部分を書きつくりですから、独断ではないことを、お断りしておきたい。やはり、まず挙げたいことは、真光寺と檀家の方々と縁の会の会員が、すっかり打ち解けて親しくなったということです。方丈さんはじめ真光寺の方々の、細やかなお気配りをされながらもそれを感じさせない、ざつくばらんな対応に、心から感謝申し上げます。また、歴代にわたって真光寺を支えてこられた檀家の方々には、新参者の縁の会員を分け隔てすることなく、親切なおつきあいをしてくださったことに、お礼を申し上げます。具体例を、少しばかり紹介させてい

ただ。

一日目の朝、バスが高速道路に入ってすぐに、飲み物が配られた。真つ先に缶ビール、カップ酒、お茶などは最後。そして、これらを率先して配ってくださったのは、何と方丈さんでした。偉丈夫なのに狭い通路を歩かれて、大きな手で。東京駅前で全員がそろったところで、方丈さんのごあいさつ。「みなさん、十分に楽しんでください」と、にこやかに一言。短いのもいい。夜の宴会。頃合、いよろしく、お決まりのカラオケとなったが、よし・いくぞう!の「雪国」を熱唱して口火を切ってくださいったのも、方丈さん。うま過ぎるのが欠点で、あとが続きそうにない。しかし、方丈さんの歌のうまさや酒の強さを百もご承知の檀家の方と先輩会員が、ちゃんとつなげてくださった。有志による二次会も、いろいろあつて楽しかったのですが、誤解を招かないよう念のために、この際コメントさせていただく。じつは、宴会の席順はもちろん、飲んだり歌ったりするは全く自由で、ゆつくり休みたい方は早めに食事を済ませ退席して一向に構わないのです。もともと服装や持ち物などにも、何の縛りもありません。ゆつたりと大いに楽しめる旅なのです。次に、肝心なことを後回しにしてしまつて申しわけありませんが、由緒ある曹洞宗の寺院で懇切丁寧な解説のほか、特別なご祈禱をしていただける絶好の機会に恵まれたと思っております。

迦葉山では、去年の可睡斎のときと同様に、豪壮な須弥壇の前で数名の僧侶が鐘をつき太鼓を叩きながら、膨大なお経をあげてくださいました。境内のたたずまいから、神仏習合の名残りをかい

ま見たり、遠い昔から深山・巨岩等に聖なるものを連綿として感得してきた信仰の歴史に思いをいたし、曹洞宗の奥の深さを再認識しました。雲洞庵の本堂で、方丈さんが「ここで般若心経をあげようかな」と、ご本尊の前に着座されました。心経をそらんじている檀家や会員の方々が唱和するなか、私は合掌し続けましたが、方丈さんの読経を介して雲洞庵の千三百年の縁起に触れたような気がしました。板敷きの廊下に正座していたのに少しも苦にならず、敬虔な気持ちに満たされておりました。

最後に申し添えます。真光寺のバス旅行は、順調に参加者を増やしてきており、今年はすてきなガイドさん付きの大型バスになりました。このバス旅行は、真光寺のご縁で、真光寺の方々と檀家の方々と縁の会員同士が親密になれる、またとないういチャンスです。隣の方などと話すうちに、同じような境遇にあつても心豊かに過ごしている方を発見したり、いろんな出会いがあります。「叩けよ、さらば開かれん」は、真光寺の門にこそピッタリの言葉であると、信じております。

ぜひ、ご一緒しましょう!



～東長寺参拝と東京スカイツリーの旅～



東京の新しいシンボル「東京スカイツリー」と 東京・四谷の岡本住職兼務寺「東長寺」へ参拝に参ります。また、巣鴨はとげぬき地蔵「高岩寺」へも参ります。お気軽にご参加できる日帰り旅行といたしましたので、この機会に真光寺団参旅行を体験されてみてはいかがでしょうか? 仏と出会い、人と出会う旅行、檀信徒、縁の会会員にかかわらず、縁者もお誘いいただき、大勢のご参加をお待ちしております。

日 時 平成25年3月16日(土) 日帰り

募集人数 45名(最少催行人数20名)

旅行代金 9,500円

コース

真光寺(7:45発)→千葉駅→錦糸町駅→
東京スカイツリー→昼食(浅草寺・仲見世)
→東長寺→とげぬき地蔵→千葉駅
→真光寺(19:30着)
(集合は真光寺、千葉駅、錦糸町駅)

上総自然学校（里山再生活動）

五月で田植えも終わり、あとは稲がすくすくと育つのを待つばかりとなりました。ですが、上総自然学校の田んぼでは除草剤などの農薬を使用していませんので、草取りを行わなければなりません。六月・七月はイベントで草取りを行い、夜は草を取った田んぼでホタルを見ます。ざらざらと日の射す昼間とは打って変わって、暗闇のなか優雅に舞うホタルは私たちの心に忘れかけていた何かを思い出させてくれるようです。自然を前にして、心の底から美しいと思える瞬間があるという事はとても幸せなことです。また、夏は谷津田や山で暮らす生物たちが活発に動き回る季節でもあります。水路に網を入れて水路の生物を探したり、山に入ってカブトムシなどを探したり、子供たちには大人気のイベントです。今年 は地元の公民館さん主宰の『ジュニア・サイエンスセミナー』の受入れ場所にも活用され、多くの子供たちが田んぼに住む生物たちと交流を交わしました。

そして、九月、十月と収穫の季節を迎え、田んぼではコシヒカリ、もち米、緑米の収穫と大忙しとなりました。収穫祭では手動の脱穀機での脱穀体験や、新米を釜で炊いて（二日間ではんと十升＝百合）、おにぎりを作って田んぼで頂きました。また檀家さんの作っている野菜を販売したり、檀家さんの栗林で栗ひろいをさせていただいたり、大変賑やかな収穫祭となりました。

また、お寺ならではのイベント、ヨガや坐禅、精進料理なども行い、普段興味はあるけれどもなかなか触れる機会がない、という若い世代の方々にも里山の自然や仏教に触れていただきました。

参加者の方の多くは都市で働く二十～四十代の独身者かご家族、あるいは近所に住んでいるけれども、田んぼに入ったことがなく、子供たちに自然を体験してほしいと願う親御さん方がほとんどです。人間も自然です。自然から切り離されて生活することが多くなった昨今、やはり自然の中で泥んこになりながら、虫さんとお友達になりながら（笑）、過ごす時間も大切なものなのだと改めて感じます。これからも地元の檀家さんのご協力を得ながら、多くの方々にここ川原井に足を運んでいただければと思います。

イベント日程

- 『簡単手作り風上げ』☆
 - ・ 一月十九日（土） 十三時～十五時
 - 『コマ豆腐作り』◇
 - ・ 二月十日（日） 十三時～十六時
 - 『植樹』★
 - ・ 三月十日（日） 十時～十五時
 - 『焚火で豆腐パン焼き』☆
 - ・ 三月二十四日（日） 十三時～十五時
 - 『蛙塗』★
 - ・ 四月十三日（土） 十時～十六時
 - 十四日（日） ※各日帰り
- 〈参加費〉
- ★大人二千円／小学生千円
 - ◇千円
 - ☆八百円
 - ※小学生以下無料
- ※ご参加頂くにはお申込みが必要です。Facebook・電話・メールにてお申込み頂けます。（連絡先は最後のページに記載あり）

★里山の生物 スジエビ



－エビ目（十脚目）テナガエビ科－
体長は40～60mmほどで、メスのほうが大きい。体には黒の帯模様があり、スジエビという和名の由来になっています。体はほぼ透明で、なんと内臓が透けて見えています。死ぬと白く濁ります。川や池などの淡水域に生息し、藻類や水草も食べますが、食性はほぼ肉食性で、水生昆虫や他の小型甲殻類、貝類、ミミズなど様々な小動物を捕食しています。生物観察会では水路でたくさん見つかりますが、水を張ったトレーに入れておくとピョンピョンと元気よく跳ねて、トレーの外へ飛び出すこともしばしば。寿命は2～3年です。

☆千葉県レッドデータブック・D
一般保護生物

お米 販売しています！

里山米

- 【品種】こしひかり
- 【農薬】いもち病予防の種子消毒。田植から収穫まで田んぼでは農薬は使用していません。
- 【肥料】有機肥料
- 【精米】一時間かけて低温で自家精米
- ☆玄米の放射線測定結果（自主検査）
ヨウ素・セシウム¹³⁴・セシウム¹³⁷
（検出限界値 1ベクレル/kg） 検出せず
- ☆収益金は「上総自然学校」の里山再生活動費に充当します。

【ご注文方法】

白米か玄米、数量（二キログラム以上）を明記し、Facebook・電話・メールにてお申込みください。（連絡先は最後のページに記載あり）



ヨガ 坐禅 精進料理



自然観察会



草取り



稲刈り



焚火で
豆腐パン焼き



収穫祭



修証義に学ぶ

霊のたたり

私が千葉県袖ヶ浦市の真光寺に入山したのは平成六年の節分の頃でした。その年の八月お盆中の夜七時ごろ、近くでガシャンという大きな音がしました。近くの道路で交通事故が起こった音でした。スピードの出しすぎでカーブを曲がりきれず、電信柱にぶつかったようです。車は大破して田んぼの中に落ちて、エンジンがかかりっぱなしになり危険な状態でした。田舎のことですから、近所の人たちがでて、消防のレスキューに協力して、すぐに機械などを持ち寄って車を田んぼから引き上げ、エンジンを切り運転手を救出しました。しかし残念ながら即死の状態だったようです。千葉県は交通事故で死亡する人が多いことで有名です。県土が広く、開発が遅れて道路が悪い場合。未開発地で利用者が少ないのに道路が整備されている場合など、複合的な要素があつて、交通事故多発地帯になっているようです。

真光寺のあたりは、まだ開発の手の入っていない農村ですが、近所には団地が多く、交通量がかなりあります。道路は整備されていて、スピードを出しますから、交通事故がとて多い地域にあたります。特にその事故が起こったあたりは急なカーブになっているせいか事故が多発していて、前の年のしかもお盆の頃にもまったく同じところで事故があり、人が亡くなったそうです。

平成六年の事故以来、村の人たちはまたあそこ

で事故が起こるのではないかとうわさしていました。二年続けば何かおかしい、構造上の欠陥以外にも何かがあるのではないかということになってきます。はからずも平成七年のお盆のころ、やはり事故が起こり、人が死んでしまいました。三年続けば確信になります。お盆になるとあのあたりで霊が事故を起こすといううわさがまことしやかにささやかれました。事故の起こるカーブの近くの人たちは気味悪がるようになりました。そこで近所の人たちは話し合い、お祓いをしてもらおうということになり、真光寺にこれを依頼してきました。

真光寺は長年人が住んでいませんでした。かなり荒れて幽霊屋敷のようになっていて、人も余り寄りつきませんでした。また住職がいないのが当たり前だったので、たずねてくる習慣もありません。お正月とお盆以外に訪れる人といえば、小学生が夏の肝試しにやってくるくらいでした。余談ですが入山して四年たったころ、寺がきれいになって怖くなくなったというので肝試しはやめることになりました。このお祓いを依頼されたとき、私は考えました。というのも私の法力が抜群の効果を発揮し、カーブのところの霊が成仏したとしても、道路の構造上の欠陥で来年のお盆の頃、また事故がおきて人が死なないという保証はないのです。もしそうになったら、私はだめな和尚のレッテルを貼られてしまう可能性があります。確固たる地盤ができていけばそういう思いもないのだろうと思いますが、新しい住職が来てお布施が高くなるのではないかと、庫裏を直すための寄付があるのではないかと、新しい住職に対して檀信徒

も不安を抱いているといった声も漏れ聞こえており、私自身も地域になじむことに暗中模索しているときでした。

仏教は浄、不浄をたてない宗教です。清いとか不浄であるとかは人の都合によるので、元来空であり絶対平等の世界に浄、不浄はないという立場です。ですから不浄を祓うということはありません。迷える者、苦しむ者を楽に導くという立場があるのみです。ですから祓うことではなく、事故で亡くなった方々の供養ならできるということになります。「でもお祓いなんかきくかどうかかわらないよ」と言いますと、カーブのある近所の人たちがお金を出し合つて、事故で亡くなった方々のために供養をしてあげたいのだということ、私は二つ返事で引き受けたのでした。

秋の彼岸の頃、私は古式にのっとり祭壇を設け、道路に向かつて供養のお経を上げました。冗談まじりに「効力は一年間だよ」と言っておいたところ、それから一年間、翌年のお盆を過ぎても事故は起きませんでした。しかし秋のお彼岸が過ぎた頃、タンクローリーが横転するという事故が起きました。幸いに運転手は怪我一つありませんでした。このころから村のうわさで私はすごいお坊さんになっていました。真光寺のお坊さんがお経を読んだら事故が亡くなった。効力が亡くなったら事故がおきた。だけど運転手は怪我一つしなかった、と。

私の考えていた不安はまったく逆の効果が出たのでした。以来、幸いなことにこのカーブでは小さな事故はあるものの、亡くなる人は出ていません。

霊は存在するか

こんな話をするとう僧侶は霊を慰めたり、成仏させたりするのが仕事じゃないかというご批判を受けそうです。確かにそうした部分はありますし、先人が考えたそのための方法も伝わってきています。しかし霊というものの存在に対して仏教は「無記」という立場をとります。あるともないとも言わないというのです。お釈迦様は人々に次のように問います。

「皆さんの中で前世の記憶がある人がいるだろうか。過去の行いによって優秀に生まれたとか、劣って生まれたとか、美しく生まれたとか醜く生まれたとかを知る人がいるだろうか。良いことをしたから良いところに生まれるとか、悪いことをしたから地獄に生まれるとかを知る人がいるだろうか」（『南伝 相応部經典』抜粋）

もちろんそんな人はいません。するとお釈迦様はこう言われました。

「それは役にもたらず、修行のはじめともならず、さとりや涅槃にも資することがない。そのゆえにわたしは説かないのである」（『南伝 相応部經典』抜粋）

もちろん前世の記憶がある人は少なく、記憶があったとしてもそれを確かめる手段はありません。長い人生の中では悪い行いも、良い行いもします。そのさまざまな行いが今現れていることを確認する手立てはありません。同じように霊という存在があってもそれを確認する手立てもありません。何より確認もできないわからないものの有無を考えること自体が空気をつかむような話で何の役に

も立たないし、それを考えることで自分の人生が幸せになることもない、だから霊とか前世とか、死後の世界については「無記」であると、つまり説かない、説く必要がないと言われたのです。ですから霊的な存在はないとも言っていない。自分自身が有意義な人生を送るために、必要であればあってもいいのです。

うことを聞きます。私の住む気城でも、家族が不和になったり、病気が続いたりすると、新宗教系の霊能者の所に相談に行く人がいるようです。ある日私の仲のいい知り合いが相談に来ました。弟の夫婦が不仲になって、その夫婦それぞれが浮気をしているのではないかと互いに疑心暗鬼になつていくうちに、心身症にかかってしまい、仕事もできなくなり病院通いをしている。その影響が自分にもでていて、精神的におかしくなってきたといった内容でした。その話の中で霊能者に見てもらったら弟の家にも自分自身も障りがあると言われたのです。そこで私に祓って欲しいということでした。

霊や霊的なものを恐れることはだれにでもあることですが、それに振り回されると、自分の人生が思わぬ方向に向かってしまうことがあります。交通事故現場の供養にしても、どんなに迷える魂を供養しても、無謀運転をして急なカーブに突っ込めばハンドルを取られて事故になり、命を失うことも十分考えられます。道路の構造上の欠陥を修復し、なおかつだれしもが安全運転をすることがなにより事故をなくす妙薬であることは疑いありません。ですから霊に責任を転嫁しないでよく原因をみつめ、改善をしていく努力をすることが重要なのです。カーブの近くの住民が、亡くなつた方のために供養をしてあげたいと考えたことは、一見霊を恐れているようですが、それだけではありません。住民たちのやさしい心はとても大切で、こうした気持ちで道路の欠陥を修正し、より安全な道を作っていくための推進役になる上で重要なのだということも忘れてはいけません。

私は誰しも多くの悩みを抱えて生きていること、互いの不信を取り除くためにはよく話し合うしかないこと、霊の障りなどは生きている人の気持ちで何とでも変わってしまうことなどを話し、自家の仏壇にお参りをして、自分の心を強くするよう努力することを薦めて、古式に乗っ取り法要をとめました。相談者はとても喜んで元気になったと言つて帰っていきました。

しばらくしてまた相談に来たのですが、その時に彼は思いがけないことをいいました。「おれは住職のお陰で今まで先祖に手を合わす気持ちもなかったのに、いまは〇〇教に入信して、毎日〇〇教の祭壇にお参りをしている。〇〇様を信仰している。」「というのです。〇〇教は霊を売り物にしている新宗教でした。

霊に責任転嫁しない

何か悪いことがあると霊能者に見てもらおうとい

お寺が宗教として機能していない現実を実感した瞬間でした。しかしこれにはわけがあります。霊感の強い教祖を敬い、その力で救われるのはと

ても楽なことです。一神教的な考えはすべてこの法則で成り立ちます。教祖の言葉は絶対です。たとえそれでうまくいかなかったも、非は教祖以外の信者にあるということになるのです。ましてや霊を売り物にする宗教は、わるいことがおこるとすべて霊の責任にしてしまいます。教祖、あるいはその法力を注入した霊を崇めることで、どうゆうわけか幸せが転がり込んできます。言うならば原因をわけのわからないブラックボックスの中に投げ入れると、出てきた答えは利益、幸せとなるわけです。一度これにはまってしまおうと何でも霊の責任にするような心になってしまいます。そうした体質になるとそこから逃れることは難しくなります。なぜならそれが楽なのです。彼が楽を選じたのは無理からぬことだと思います。

自分の力で目覚める

仏教はそれとは正反対の宗教です。仏教の考え方は決してブラックボックスに投げ込まず、生きていることを明らかにし、死ぬことを明らかにする宗教だからです。そのことを言葉にすると「南無帰依法」という言葉になります。法とは水が上から下に流れるということ、つまり当たり前ということです。当たり前な心理とは、因果であり、縁起であり、無常であり、無我であるといった人間の都合で変わることのない考え方です。自分に苦しいことがあれば、その原因を冷静かつ徹底的に究明し、輝かしい未来にむけて努力するのが仏教の考え方です。それは責任転嫁できない分、とても苦しいことですし、またその変わることのない

い真理はどこか他の場所から導いてくれるのではなく、自分の心の中になくはなりません。自分の心が自分に左右されない、真理に裏づけされた正しいものでなくてはならないのです。これほどでも大変なことですよ。誰しも自分の都合のいいように考えたがります。ですから仏教を信じる者は「南無帰依法」と唱えながら、「自分の心が正しいくありますように」、「自分の心が真理とともにありますように」と念じていかなければならないのです。

相談してきた友人に言いました。どんなに霊力の強い教祖でも、すべての人を救うことはできない。たとえ一時的にうまくいっても、他の責任に転嫁しては改善できるものもできなくなってしまう。ましてや会ったこともないおばあさんを、〇〇様などとあがめていては自分の人生の生き方を誤ってしまう。たとえば私があなたの恩人ですばらしい人であつても、間違いも犯すし、悪いこともする。だからどんなにすばしくてもどこまでいっても岡本ちゃんなんだ。〇〇様だって同じではないかと論じました。責任転嫁して人のせいばかりにしている人や、わけのわからないものをあがめ、信じた人の末路はどうなるか。それは人生の経験でわかるではないかと言うと、かなりショックを受けて、〇〇教を抜けることを約束してくれました。

人生のリズムが狂う時、人は日常では考えられないほど無力です。自分の心が蝕まれ、それがまわりの人に波及し、どうしようもない状態に陥ります。そうなつてからではなかなか難しいのです。常日頃から、「南無帰依法」ととなえ、「自分の

心が正しくありますように」と念じて、強い心を作っていくことが大切なことだと思います。

つつく

ご寄進者ご芳名

金壺拾萬円 畠山ひろ子様

ご寄進いただき心より御礼申し上げます。皆様からのご寄進は、仏具等に使用させていただきます。当山寄進帳にお名前を記入し永く寺録に残します。

住職

寺のある暮らし

定年を迎えた、伴侶を亡くした、心をリフレッシュしたい、そんな時にお寺に来てゆっくりして頂きたく、お寺を開放いたします。

朝のお勤めと、食事、就寝以外は自由です。イベントも用意しており、畑作業、庭いじり、里山散策、囲碁など自由な時間を過ごせます。

また、日帰り行事として法話の会を開催いたします。住職による法話の後、一緒に食事をして、午後は坐禅や写経をいたします。どちらも老若男女問わず気軽にお申し込みご参加下さい。

■寺のある暮らし（一泊二日 七千円）

四月十六日 十一時集合 ～ 十七日 十三時解散

■法話の会（日帰り 三千円）

十時半集合 ～ 十四時解散

二月二十六日・三月二十二日・四月 三十日

行事予定

「檀信徒」

◇一月 三日(木) 『修証会』年頭大般若祈禱法要

午後二時より 大般若祈禱法要

◇三月 十七日(日) 『春彼岸法要』

午後二時より 彼岸法要

※法要後には落語を予定しております。

◇四月 七日(日) 『花まつり法要・檀信徒総会』

午前十一時より お釈迦様の誕生を祝います。
法要後には総会を行います。

「ご詠歌練習日」

一月 八日・二十二日

二月 十二日・二十六日

三月 十二日・二十六日

四月 九日・二十三日

場所 真光寺

時間 八時より (十月以降七時半)

※ご詠歌はどなたでもご参加できます。気軽に
お問い合わせ下さい。

◆新規梅花講員募集◆

檀信徒の方、縁の会会員、
ほかご縁者の方、新規講員を
募集いたします。女性はおち
ろん男性の方も大歓迎です。
四月の練習日より一緒にス
タートいたします。気軽に申し
込み下さい。



2013 平成25年 行事予定表

■黒字 檀信徒 ■青字 上総自然学校
■緑字 縁の会 ■赤字檀信徒・縁の会合同

1	2	3	4
1 火	1 金	1 金	1 月
2 水	2 土	2 土	2 火
3 木	3 日	3 日	3 水
4 金	4 月	4 月	4 木
5 土	5 火	5 火	5 金
6 日	6 水	6 水	6 土
7 月	7 木	7 木	7 日
8 火	8 金	8 金	8 月
9 水	9 土	9 土	9 火
10 木	10 日	10 日	10 水
11 金	11 月	11 月	11 木
12 土	12 火	12 火	12 金
13 日	13 水	13 水	13 土
14 月	14 木	14 木	14 日
15 火	15 金	15 金	15 月
16 水	16 土	16 土	16 火
17 木	17 日	17 日	17 水
18 金	18 月	18 月	18 木
19 土	19 火	19 火	19 金
20 日	20 水	20 水	20 土
21 月	21 木	21 木	21 日
22 火	22 金	22 金	22 月
23 水	23 土	23 土	23 火
24 木	24 日	24 日	24 水
25 金	25 月	25 月	25 木
26 土	26 火	26 火	26 金
27 日	27 水	27 水	27 土
28 月	28 木	28 木	28 日
29 火		29 金	29 月
30 水		30 土	30 火
31 木		31 日	

行事予定

〔縁の会会員〕

◇ 一月 六日 (日) 『七日法要』 年頭祈禱法要

午前十一時より 授戒式・月例供養

午後 大般若祈禱法要

お炊き上げ供養

※前年の御札や御守、お正月のお飾りをお持ち下さい。合同でのお焚き上げ供養をいたします。

◇ 二月 九日 (土) 『七日法要』 涅槃会・節分

午前十一時より 授戒式・月例供養

午後 涅槃会・坐禅・写経・写佛

◇ 三月 九日 (土) 『七日法要』

午前十一時より 授戒式・月例供養

午後 坐禅・写経

◇ 三月 二十日 (水) 『縁の会彼岸法要』

午前の部 午前十一時より法要

午後の部 午後一時半より法要

※縁の会合同での彼岸法要を行います。

※お彼岸供養のお塔婆の申込みはお電話等で

申し込み下さい。

◇ 四月 六日 (土) 『七日法要』 植樹祭

午前十一時より 授戒式・月例供養

午後 花まつり法要・植樹祭

※年に一度の墓苑に植樹ができる日です。樹木はお寺で用意いたします。

※雨天時午後花まつり法要(お釈迦様の降誕会法要)のみ。



4月 植樹祭



1月 お焚きあげ供養

元朝大祈禱 (元日・三日)

新年の安全、諸願成就を祈念してご祈禱を承ります。来山前にお電話等でお申し込みください。申込みが無い場合でもお受けできますが、お待たせすることもあります。

大般若祈禱 縁の会 御守護

受付時間 午前9時より午後4時まで(三日は正午まで)

法要時間 約十五分

祈禱料 三千元〜五千元程度

※祈禱料には、木札とお守りが含まれます。

願 意 家内安全 諸災消除 諸願成就 如意吉祥

交通安全 合格祈願 厄除守護 身体健全

当病平癒 身体堅固 良縁祈願 安産祈願

そのほか、ご希望に応じてご祈禱いたします。

■ 送迎時間 【七日法要】

□ 電車の方 JR内房線「袖ヶ浦」駅10時10分着

□ バスの方

【土日祝】

・品川発9時30分↓袖ヶ浦BT 10時17分着

・横浜発9時30分↓袖ヶ浦BT 10時09分着

・川崎発9時25分↓袖ヶ浦BT 10時14分着

・新宿発9時05分↓袖ヶ浦BT 10時08分着

【平日】

・品川発9時25分↓袖ヶ浦BT 10時12分着

・横浜発9時30分↓袖ヶ浦BT 10時09分着

・川崎発9時15分↓袖ヶ浦BT 10時04分着

・新宿発9時05分↓袖ヶ浦BT 10時08分着

□ お車の方 10時40分頃までにお越しください。

各種お申込み連絡先

真光寺 〒299-0201 千葉県袖ヶ浦市川原井634

TEL 0438-75-7414 (代表) TEL 0438-75-7365 (縁の会事務局) FAX 0438-75-7630

e-mail ennokai@shinko-ji.jp (縁の会)

satoyama@shinko-ji.jp (上総自然学校)